

図書館史を考えるセミナー（第二回）の御案内

第二回セミナー（東京）を本年9月2～3日の両日、下記要領で開催いたします。これは「図書館史研究の現状と展望」をテーマとした第一回セミナー（名古屋）に続くものです。

テーマは「開かれた図書館」づくりの歴史的系譜をたどることにより、図書館史研究の現状と課題を探ろうとするものです。第一日は大正・昭和初期の図書館活動を、自ら実践して来られた諸先輩（弥吉光長、もりきよし、清水正三の各氏）に語っていただきます。二日目は海外（西欧）と日本における、大学と国立図書館での「パブリックなもの」に焦点をあてて考えてみたいと思います。

皆様の御参加をお待ちします。

セミナー実行委員会

記

テーマ：図書館史研究の現状と展望（第二回）

—「開かれた図書館」づくりの歴史的系譜をたどる—

日時：1984年9月2日（日）—3日（月）

会場：東京 赤坂 アジア会館

㊦ 東京都港区赤坂8-10-32

定員：40名（先着順）

費用：参加費 3,000円（但し、学生は1,500円）

懇親会費 5,000円（第一日目終了後 夕食も兼ねます）

宿泊費 4,000円

* なお、上記費用には3日の朝食、昼食、休憩時の飲み物等は含まれていません。会館内の食堂、喫茶室でそれぞれの時間に各自でおとり下さい。

申込：同封の振替用紙に必要事項を記入し、8月20日（必着）までにお申込下さい

* 参加申込の確認は、申込金の受領はがきの発送でおこないます

* 出張扱のため、公式の文書が必要な方は事務局まで連絡下さい

プログラム

9月2日(日)

12:00 ~ 12:30 受 付
12:30 ~ 13:00 開 会
13:00 ~ 17:30 第一部 大正・昭和初期の図書館活動
司 会 石井 敦 (東洋大学)

報告 I. 和田万吉の図書館思想のことなど
弥吉 光長 (50分, 国学院栃木短期大学)
報告 II. 今沢慈海とその周辺—東京市立図書館の「黄金時代」—
清水 正三 (50分, 立教大学)

質 疑

—ティータイム—

報告 III. 青年図書館員連盟と間宮不二雄
もりきよし (50分, 青葉学園短期大学)

質 疑

討 論

17:30 ~ 18:00 連絡・休憩
18:00 ~ 20:00 懇 親 会 (夕食をかねる)

9月3日(月)

7:00 ~ 9:00 朝食
9:00 ~ 11:30 第二部 大学図書館・国立図書館におけるパブリ
ックのもの (1)海外の場合

司 会 常盤 繁 (独協大学)

報告 I. ドイツ : ゲッチンゲン大学図書館の歴史
津田 純子 (50分, 名古屋大学大学院)

報告 II. フランス: 国立図書館の役割
寺田 光孝 (50分, 図書館情報大学)

討 論

11:30 ~ 12:30 昼食

9月3日(月)

12:30 ~ 15:30

第二部 大学図書館・国立図書館におけるパブリックのもの(2)日本の場合

司会 阪田 蓉子 (梅花女子大学)

報告 I. 大学図書館における公開の歴史

岩猿 敏生 (50分, 関西大学)

報告 II. 帝国図書館におけるパブリックなものについて

中林 隆明 (50分, 国立国会図書館)

討 論

—ティータイム—

15:30 ~ 16:30

全体討議・まとめ

司会 工藤 一郎(東京大学東洋文化研究所)

まとめ 藤野 幸雄(図書館情報大学)

16:30 ~ 17:00

連絡・閉会のあいさつ

17:00

散 会

*セミナーについての連絡・問い合わせ先

小川 徹(セミナー実行委員長)

* なお、アジア会館には、地下鉄半蔵門線で青山一丁目駅下車、赤坂郵便局の方向にでると近いです。同封の地図を参照してください。

*事務局からのお知らせとお願い

(A)昭和59年5月3日以後の新入会員

....., 会員数 121名 6月30日現在

(B)お願い

59年度の会費払込状況は、6月30日現在82パーセントとなっています。59年度の会費を未納の会員にたいしては、セミナー用の振替用紙と別に、いま一度振替用紙を同封しましたので、よろしく願います。会費は1,000円です。

『図書館史研究』創刊号のお知らせ

日外アソシエーツから、9月上旬にセミナーとあわせて『図書館史研究』第一号が創刊されます。値段は1,300円(予価)になる予定です。第一号の内容は以下のようになっています。

1. 戦後公共図書館実践史 石井 敦
2. 図書寮と写経事業 小川 徹
3. 古代中国における文献をめぐる諸問題
—春秋を主として— 工藤一郎
4. 明治20年代刊行の印刷辞書体目録について
—「東京図書館工芸書目録」および
「海軍図書目録 英書の部」にか
んする研究— 安達将孝
5. 文献紹介 藤野幸雄

ぜひお買いもとめください

ニュース・レターに掲載する図書館史についての短い原稿を募集しています

- | | |
|------|--|
| 内容 | <ol style="list-style-type: none">1. 単行書の書評2. 資料紹介3. 海外文献の紹介や論評4. 論文の紹介と論評 など |
| 投稿規定 | <ol style="list-style-type: none">1. 枚数 横書原稿用紙12枚以内2. 送付先 椙山女学園大学(事務局)3. 原則として、送付された原稿は、次回のニュース・レターに掲載する |

(文責 川崎 良孝)

イギリス公立図書館成立に関する邦文文献展望

嵯山女学園大学 川崎 良孝

『図書館情報学研究文献要覧 1970-1981』（日外アソシエーツ）をもとに、イギリス公立図書館の成立を扱った論文を取り出し、研究の動向と展望をまとめてみたい。

この方面での研究の進展は、芝田正夫氏(1)、森耕一氏(2)、常盤 繁氏(3)などの業績によってもたらされた。こうした研究を支えたのは、Irish University Press による議会資料の発行であり、それによって一次資料にもとづく研究が容易になったことである。さらに、Munford によるE.Edwards の研究、Kelly による図書館史研究、Library History という図書館史についての専門雑誌の刊行など、イギリスでの研究の進展も無視できないであろう。

まず、芝田論文(1-a)の大きな関心は、「公共図書館が法制定によって制度的保障を獲得していった過程において、公権力はいかなる機能を図書館に期待したか」(p.107)を解明することにあつた。そして、上述の議会資料の実証的記述に重点をおき、1850年法の性格の解明を意図したのである。同論文は、1849年の下院公共図書館特別委員会で主流をしめたのは、Ewart, Brotherton などの社会改良家と、Lovett らの労働者教育の実践家たちの思想であり、いずれも「社会改良のための図書館」という考えを基盤にしていると結論した。

同じ1976年に発表された(1-b)において芝田氏は、(1-a)を受け、1850年法の成立過程を探っている。(1-b)において「過程」という語であらわされているものは、マクロな観点からのもので、たとえば、法成立についての議会の動きなどを詳細に追ったという意味での「過程」ではない。この分野はいまだ課題として残されている。(1-b)はKelly を参考に19世紀前半における図書館状況を紹介している。また、1850年法を準備するものとして1845年博物館法を重視している。(1-b)は論文というより、氏の構想を提示した研究ノートとして考えるほうが、いっそう適切だろう。

(1-a)において芝田氏は、ブルジョワ急進主義者が労働者階級を対象に社会的な立場から公立図書館をもたらしたと結論した。その研究の過程で、Edwards が急進派とは相違した図書館論を構想していたことをつきとめ、Edwards に限定した論文(1-c)が生まれることになる。同論文はEdwards の公共図書館論を、以下の三

点にまとめている。(p.247)

1. 公共図書館を地域の全住民に公開する施設として位置づける
2. 公共図書館の運営は地方自治体が責任をもち、地方税によって維持運営すべきである
3. 公共図書館の利用が“恩恵”ではなく、“権利”である限り、無料でなければならぬ

芝田氏は、この三点を現代的な意味を持つものと強調した。同論文の後半では、Edwards が館長をつとめたマンチェスター市立図書館と、同時代のリバプール市立図書館とが比較されている。

最後に、芝田氏は(1—d)において、19世紀後半における図書館状況を扱っている

芝田論文を軸に、常盤氏、森氏の論文を探っておく。(1—c)が発表されたのは1977年であったが、1982年になり森耕一氏が(2)を発表した。同論文は、公立図書館の形成という観点から、Edwards の図書館論を解明している。芝田、森両論文は、公立図書館の原点を探るものとして重要な業績になるであろうが、両論文の相違に注目する必要がある。芝田論文は、議会資料でのEdwards の証言(証言番号、NO. 10)を次のように訳している(p.246)

公共図書館とは、公費によって全部あるいは一部が運営され、全ての人々に解放されている図書館である。

すなわち、芝田論文では「公費で・・・運営」と「すべての人々に開放」とが、“and”でつながっている。一方、森論文では同じ部分が“or”でつながっている。森論文は直接には芝田論文に言及していないものの、この個所での記述の強調はあきらかに芝田論文を意識したものである。原文では、たしかに“or”となっており、この点については芝田氏の読み誤りと考えざるを得ない。そして、この部分での誤りは、芝田論文にとって大きな欠点となっている。さらに、Edwards やEwart の把握についても両論文は微妙な差をあらわしており、今後の研究が両論文を突き合わせたところから出発することを期待したい。なお、森論文は、Edwards の図書館論が変容していくことを指摘している。この指摘は注目されてよからう。

いまひとつ欠かせない重要な業績として常盤繁氏の論文(3)がある。(3)と芝田論文(1—a)とは、やはり突き合わせて読まれるべきであろう。両論文とも、1850年法の役割を探るという点では一致している。常盤論文は「公共図書館運動を急進派

の思想と活動の中においてみる時、結局それは、中産階級の世界観に大衆を同化させ、社会の秩序と繁栄を確保する試みの一つであった」(p.6)とまとめている。こうした解釈は芝田論文とその大筋において一致していると考えてよい。

芝田論文は、いわゆるEwart 委員会、Ewart 報告についての概略の説明、およびEwart 委員会の証言の分析から構成されている。後者はさらに、「当時の図書館状況」「公共図書館に求められたもの」という二つの節から成っている。こうした論文の構成という観点からすれば、「公共図書館に求められたもの」に限定した常盤論文は、より限定的であり、結果として芝田論文を深めたと位置づけることも可能である。

しかし、公共図書館の役割を探る手続きは両者で相違している。芝田論文の場合、Wellard, Murison, Altickという研究者の諸説をまとめ、それを実証的に検証するという方向を取る。この方式は何ら非難されるべきではないが、ひとつの限界を結果として生み出している。というのは、主要な研究者の諸説のまとめの枠内に関心が限定されることになるからである。一方、常盤論文は先行研究を一応脇におき、1850年法に期待された役割を諸資料から全体的に浮かびあがらそうと意図している。そのため、同論文では、1.教育、2.娯楽、3.産業教育、4.文化(学問・文芸)、5.思想統制と公共図書館史にみられる図書館の役割を列举し、その各項目について一次資料にもとづいて検証・検討していくという方法をとっている。

また、芝田論文では、公共図書館の役割におとらず、それを保障する制度面への関心が強い。この関心は、当時の図書館状況の把握という方向を導くと同時に、Edwards に注目するという結果となる。すなわち、図書館論という観点から、Edwards とEwart, Brotherton との区別をもたらしている。(1-c)はそうした意味で(1-a)から導かれる当然の論文であったといえるだろう。一方、常盤論文は、制度面への関心は直接的には論中にはあらわれてこない。上述の五つの役割が、諸一次資料の中でどのようにあらわれていたかを実証的に検討している。この方向は、Edwards を(ブルジョワ)急進派の一員として、Ewart, Brotherton と、その大枠において同列に考えるという結果となっている。それはともかく、1850年法にたいする上からの要求に焦点をしばり記述した常盤論文にとっては、次の段階として労働者階級自身の中から生まれた政治活動や教育運動と1850年法との関連を明らかにする必要がある。芝田氏が「Edwards の公共図書館論」を発表し、常盤氏が「メカニックス・インスティテュート運動と英国の公共図書館法」(Library and Information Science, no.14, 1976, pp.312-323) を発表したのは、両氏の研究の方向としては当然の帰結であったといえないであろうか。

注

* 芝田 正夫

- (1-a) “イギリス公共図書館法の成立とエフォート報告”
『図書館界』 vol.27, 1976, pp.107-117
- (1-b) “1850年のイギリス公共図書館法成立について”
『図書館界』 vol.27, 1976, pp.178-180
- (1-c) “近代公共図書館思想の原点—エドワード・エドワーズの
公共図書館論”
『京都大学教育学部紀要』23号, 1977, pp.245-254
- (1-d) “19世紀後期におけるイギリス公共図書館サービスの発展
—その歴史的構造の分析— ”
『図書館界』 vol.30, 1978, pp.15-198

* 森 耕一

- (2) “近代公立図書館の形成”
『京都大学教育学部紀要』28号, 1982, pp.17-33

* 常盤 繁

- (3) “ユアート法と議会”
『図書館学会年報』vol.23, 1976, pp.1-19